

危機感を出発点に

文・国谷裕子



photo: Takehana Tetsuro



国連が策定したSDGsのアイコン

「我々は、地球を破壊から守ることを決意する」。2015年9月、この強いメッセージが発せられた。国連の全加盟国によって採択された「持続可能な開発目標 (SDGs) アジェンダ2030」だ。同じ年の12月、今世紀末までの気温上昇を産業革命前と比べ2℃未満に抑えることを目指す「パリ協定」も締結された。この二つの世界的な合意は今後の企業のあり方や私たちの暮らしのあり方など、あらゆる分野で変革を迫る。2015年は将来、人類にとって最も重要な年として記憶されることになるかも知れない。

SDGsとパリ協定の背景には、今のままでは地球も社会も経済も立ちゆかなくなるという強い危機感がある。ありとあらゆる資源を使い、大量生産と大量消費、そして温室効果ガスの大量排出を含む大量廃棄を続けることで豊かさを求めてきた人類は、いまや地球を作り替えるほどの力を持つようになってしまった。その力は、地球が持つ再生能力を破壊しつつある。次々に発せられる地球からの悲鳴が「地球には限界がある」という、忘れかけていた事実を私たちに気づかせたのだ。

アメリカ海洋大気局が発表する地球の陸と海面の平均温度は、このところ毎月のように20世紀平均と

比べて0.8℃あまり高い。猛暑も、巨大なハリケーンも、豪雨も、地球からの警告と見られている。16年には2400万人以上が自然災害によって住んでいた場所からの移動を余儀なくされた。加速度的に進む土壌の劣化、淡水の不足、海洋の酸性化、生物多様性の喪失。国連副事務総長のアミーナ・モハメッドは2年前、こう私に語った。「地球は私たち人間なしでも存続できますが、私たちは地球なしでは存続できません。先に消えるのは私たちなのです」

さらに世界がグローバル化するなか、経済成長の恩恵を受けられない人々が増えて格差が広がった。社会の分断が進み、これまで築かれてきた社会制度や経済制度への信頼が揺らいで世界は不安定化している。これに対して、SDGsは「誰も置き去りにしない」と宣言する。

30年にどのような世界を迎えようとしているのか。17分野の目標と169のターゲットからなる野心的な羅針盤を手にして、いま私たちは岐路に立つ。「我々は、地球を救う機会を持つ最後の世代になるかもしれない」(アジェンダ2030)

採択から2年、まだSDGsの大きなうねりは起きていない。しかし、いま世界では、SDGsの視点で現実を見つめ、変革へ向けた新たなチャレンジが始まっている。●

エス・ディー・ジーズ SDGsとは?

[17分野の持続可能な開発目標]

- 1 貧困をなくそう
- 2 飢餓をゼロに
- 3 すべての人に健康と福祉を
- 4 質の高い教育をみんなに
- 5 ジェンダー平等を実現しよう
- 6 安全な水とトイレを世界中に
- 7 エネルギーをみんなにそしてクリーンに
- 8 働きがいも経済成長も
- 9 産業と技術革新の基盤をつくろう
- 10 人や国の不平等をなくそう
- 11 住み続けられるまちづくりを
- 12 つくる責任 つかう責任
- 13 気候変動に具体的な対策を
- 14 海の豊かさを守ろう
- 15 陸の豊かさを守ろう
- 16 平和と公正をすべての人に
- 17 パートナースhipで目標を達成しよう

SDGs (Sustainable Development Goals=持続可能な開発目標) は、環境や人権、開発、平和など国連がこれまでそれぞれ取り組んできた課題をすべて合流させて作られた。2015年9月、加盟193カ国が全会一致で「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」を採択。そこにSDGsの17分野の目標と、具体的な行動の目安となる169のターゲットが書き込まれた。基本となる理念は「誰も置き去りにしない」。目標策定には各国政府の代表だけでなく、専門家や市民社会も加わった。SDGsの新しさは、さまざまな課題が実は根っこで互いにつながっているとらえる点だ。解決に向け、多様なアイデアやアプローチが可能だ。ただ、大きな目標はあるものの、達成への方策が決まっているわけではない。資金の確保も進まなければ「絵に描いた餅」で終わる懸念はある。

相互に関連する世界 | ムンバイ・インド / ダッカ・バングラデシュ

その服、誰が作ったの?

関連するSDGs目標



アルバイトの時給で買えるTシャツ。学生時代、なぜこんなに安いだらうと思っていた。綿をつむぎ、裁ち、縫う。多くの工程に多くの人が関わっているはずなのに。バングラデシュの縫製工場で惨事が起きて、忘れていた疑問が甦った。

成長と貧困が同居するインドの商都ムンバイ。世界最大級と言われるこの街のスラムで生まれ、成功を取めたアパレル工場がある。スラムの女性が自立できるように正当な賃金を払いながら、すぐれたデザイン性で販路を海外にも広げて売り上げを伸ばしてきた「クリエイティブ・ハンディクラフト」だ。それがいま、これ以上



「クリエイティブ・ハンディクラフト」の作業場。女性20〜25人でグループをつくり、仕事時間や給与配分を相談する
photo: Mori Mayumi

の事業拡大に歯止めをかけようとしている。

もともとは女性を支援するためにスペイン人修道女が1980年代に起こした自助組織だった。手縫いの人形を街角や教会で売って細々と収入を得ていた。代表を引き継いだジョニー・ジョセフ(51)が2002年、「商売になるものを作らなければ持続可能な支援はできない」と方針を変え、アパレル業に乗り出した。

デザイナーを雇い、スラム内の空き部屋にミシンを置いてアパレルをを広げていくように作業所を増やし

ていった。製品の質の高さから、活動に理解のある業者を中心に海外メーカーからも注文が入り始め、日本にもフェアトレードブランド「ピープルツリー」などを通じて出荷している。02年に年間550万円程度だった売上総額は、1億7000万円に達し、エンカル・ファッションの代表的な存在となった。

12の作業所と工場で300人あまりの女性が働く。平均月給の1万ルピー(約1万7000円)は、インドの公立学校教師の初任給を上回る水準だ。託児所や子供が学校



▶消費者がジーンズ1着に50セント(約57円)多く払えば、工場労働者の給与は5倍にできる(労組の試算)

に通う費用は総収入の1割にあたる海外からの寄付でまかない、原料費と施設管理費をのぞく売り上げはほぼすべて給与に回している。「息子は学校に通い、エンジニアになった。私や夫よりいい人生を与えることができた」。自助組織時代に参加してまもなく勤続25年になるビオラ・ジョーズ(46)はクッションカバーをたたむ手を止めずに言った。だが、この数年は事業の拡大に歯止めをかけ、毎年100人ほどの求職者を断っている。賃金を維持して社員を増やすには、社の方針に合わない大口注文も受ける必要がある。そうすれば、厳しい価格競争にさらされ、寄付があっても給与水準は半分ほどに落ちこみ見通しになるのだという。

ジョセフは複雑な心境を打ち明けた。「多くの人を雇いたい気持ちと、搾取の構造にのみ込まれる懸念との間で揺れています。我々には信じられない安さで仕事を請ける工場はいくらでもあるのです。まともな形で人を雇うことが市場でどれだけ不利になるか痛感しています。冷酷な企業がうらやましくなることさえありますよ」

50セントで変わる暮らし

低価格の受注を可能にするのは、低賃金と劣悪な労働環境だ。世界のファストファッションを支える、